



桂林市中医医院から

こんにちは！

No.12 2008.04

雨の日が続いている。3月から4月にかけてやって来るこの湿気の時期。紙類は水分を含んで波打ち、食品はカビの衣をまとう。。さあ、1日中太陽の出ない暗〜い冬もおしまいだ。もうじき夏が来る！春をすっとばして夏が来る。うかうかしてられない。ゴールが見えて来ている！！

## 第5回 日中理学療法科学学会 国際学術大会

現在、中国国内で活動するリハビリテーション隊員は過去最多の7名となった。たった一人ではスズメの涙でも7人集まれば水溜りにはなるのでは？そんな思いから、昨年12月末、3月に北京で開催される学会において隊員の活動を紹介しようと思い立った。

日頃、それぞれ離れた任地で活動している私たちは、インターネットを利用してメールで文章のやり取りをしたりチャットミーティングをしながら準備を進めた。それぞれの活動をしながらの平行作業であったため、ミーティングの定時には1日の活動で疲れきって居眠りをしてしまっていて…そんな人を携帯で起こして…ということもあった。しかし、文章のやり取りだけではやはり内容が不足していたり、隊員間での意見がまとまっていなかったりと、学会前に2日間用意していた準備日はバタバタであった。学会前日はホテルの部屋に集まり、深夜まで発表練習を繰り返した。



3月29日、中国リハビリテーション研究センター（北京）において学会は開催された。日中から230名ほどの参加があった。私たちは口述発表とポスター発表各1題の2題を発表した。多少、この学会内における隊員の存在は蚊帳の外？という印象を受けたが、これだけの人数で隊員が参加するのは初めてであり、これから時間をかけて隊員の存在をアピールしていけばいいのかなと。発表では日々私たち隊員が活動する地方都市の

病院の様子とリハビリテーションの現状を紹介したが、多くの方々から関心を得られ、当初の目的は達成されたと思っている。また、「これが中国の全てではないはずだ！」などというご意見もあったが、これも私たちの発表に関心を持っていただいた結果であると受け止め、問題提起となったのではないかと考えている。残念であったのは、中国からの参加者のほとんどが会場となった中国リハビリテーション研究センターのスタッフであったことである。しかしながら、中国人発表者のなかにも隊員と同じように中国全土におけるリハビリテーションの発展を見据えて問題を提起している方がおり、そのような方がいることを知っただけでもこの学会に参加した意味はあったのではないかなと思う。



その夜は日本食を食べながら打ち上げ、翌日、それぞれの任地へと帰った。若干、燃え尽き症候群？的な部分もあるが、一息入れてまたそれぞれの活動に力を注ぐのでしょ。そして、次なる野望は？？ オリンピック・パラリンピック終了後の10月には、北京においてリハビリテーション国際フォーラムが開催される予定になっている。ベイの野望はこのフォーラムに現配属先のスタッフを巻き込んで参加すること。この頃ベイは任期を終了して日本に戻ってますけどね、、彼らがやるというならば、ベイは戻って来ます！（北京までなら。。）

### お知らせ その1

『第3回北京国際リハビリテーションフォーラム』

中国リハビリテーション研究センター主催

2008.10.23~28

中国 北京市 中国リハビリテーション研究センター

### お知らせ その2

『2008 国際作業療法研究討論会』

香港職業療法学院、中国リハビリテーション医学会主催

2008.11.13~16

中国 広東省広州市 労働災害リハビリテーションセンター

潜入しホ?!

## 北京の病院に入院。。

医療隊員の極めつけの体験とも言おうか…3月、ペイは北京の病院に入院し、驚くことなかれ、手術を受けた。(驚きますよね…)全身麻酔、内視鏡による2時間ほどの手術であった。

帰国までもってほしいと願ったペイの身体、静かに悲鳴をあげていた。年に一度の健康診断、昨年に引き続き尿検査でひっきり、分院の医者が「桂林の水は結石が出来やすい」とエコー検査を進めてくれた。その時、偶然にも発見されたのが『右卵巣嚢腫』すでにすでに握りこぶし大となっていた。事務所に連絡、手術となると日本で行うことになり一時帰国、残りの任期から考えると任期短縮の可能性があるかと告げられた。早く帰りたい…日頃そう思っていたにもかかわらず、「今は帰りにたくない!帰れない!」という思いに1人おしつぶされそうであった。痛くも痒くもないのに手術が必要ってどういうこと?今しなきゃいけない手術なの??卵巣なんて2つあるから1つくらいなくなってもいい!インターネットで色々調べその危険性などは知っていたが、そんなことばかり考えていた。

2月末、まずは北京の病院で再検査となった。桂林での結果はウソであってほしいと願ったが、大きな代物は確かに存在していた。結果は北京にいる健康管理員を通して日本の本部の担当医師に伝えられ、同時にペイが北京での手術を希望することも付け加えられた。はっきり言って手術は怖かった。でもそれは日本でするにしても同じだろうと思った。それよりも、せっかく流れ始めた活動を終結して去ることが考えられなかった。待つこと1週間。本部の医師より北京での手術の許可が下りた。うれしかった。

隊員が万が一北京において入院する場合は国際部の個室になるのだが、今回は北京オリンピックに向けての改修工事が行われており、一般病棟への入院となった。6人部屋の真ん中にもう1つベッドの入った7人部屋。カーテンレールはあるのにカーテンのないオープンな病室であった。同室のおばちゃんたちは「何の病気だ?」などストレートに聞いてくる。しかし、手術前の心細いペイにはしつこいほどのおしゃべりがありがたかった。手術当日、待てど暮らせど呼びがかからない。どうやらこの日の最後の術患者だった。17時を過ぎた頃、ようやく呼びがかかり、おばちゃんたちが見守る中で術着に着替えた。ストレッチャーに乗り天上を見上げた。「ああ、まさに今私は『病人』なのだ。」そんな初めての感覚に震えそうな身体をグッとおさえた。17時30分手術室入室。医者に質問される。緊張していたが自分なりに答えた。答えたつもりだったが医者はため息をつく。もう一度された質問に対して答えた。医者は声を荒げる。。いったい何が??そう思った瞬間、そこにいたスタッフのほとんどがポケットから携帯電話を取り出し誰かに電話し始める。1人のスタッフの電話が医者に渡され、ペイに言ったのと同じことを繰り返す。次いでその電話はペイに渡され、電話は日本人と思われる人の声で医者の用件が伝えられる。だから…それは分かっている。。医者にもう一度そう伝えようと、医者はあきれたように「聞き取れないのか!」と大声を出した。(いったいなんなのよお!!!文化の違いの範囲じゃない!それを怒ってどうするの!!!)…「起きて!起きて!」どうやら手術は終わったようだった。麻酔から醒めたのだ…そう思った瞬間、終わったことの喜びと無事目が醒めた安堵、麻酔をかけられる前の苛立ちときちんと言葉の伝わらないそんな環境で手術をすることを決意したことの大きさに今さらながらに気付く…号泣した。

術後室での世話は護工(フーゴン)と呼ばれる人が全てしてくれた。この護工、医療的資格はなく家政婦的存在。ただし、この病院では術後室専門に護工を雇っているようで、専門用語は使えないものの経験から来る術後の知識は持っていた。看護師はというと点滴を換えるだけ…。清拭やトイレの付き添い、食事に関することなど全て護工がしてくれたし、創部の消毒は医者がした。日本で入院したことはないけれどずいぶん違うな〜と、術後の入院ライフは医療面の観察に励んだ。術後の回復は順調で4日後には退院、その後、北京で2週間の静養をし、3月末に帰任した。



### 気になる?! 術後食

術後24時間 絶食 (ペイは12時間後から食べ始められた♪)

1日目 朝:米湯 (米のとぎ汁かぁ??と思うほどマズかった)

9時:大根スープ (涙が出るほどおいしかった)

昼:具なし味なし茶碗蒸し (マズかった。。。)

夜:具なし味なし茶碗蒸し (連続かよ…涙)

2日目 朝:お粥 ゆで卵 (毎食の卵…栄養価高いのね…)

昼:卵トマトスープの伸び伸び面 (勘弁してえ〜)

夜:卵トマトスープのワンタン (涙…)

3日目は2日目同様 (号泣!!)、4日目から普通食 (退院じゃい!).

3日目の朝、事務所のスタッフが買って来てくれたケンタッキーのお粥 (中国ではメニューにある) がかなりおいしく感じた。。

編集後記

### ペイの嘆き

3月下旬、現職教員参加の同期隊員を見送った。ペイより隊次の1つ早い先輩隊員も見送った。最多10人いた桂林隊員も3人となり、…そう頻繁に会っていたわけではないが…淋しい。現職教員の彼らはもう日本社会に復帰して働き始めていると思うと…不思議な感じ。ペイの任期もいよいよ90日を切った。『出来ることを出来る分だけ』やるぞ!! (ペイ)